

佛 教 研 究

第
二
卷
第
四
號

眞宗大谷大學
佛
教
研
究
會

佛教研究第二卷第四號

目次

口 繪

太子和讚斷簡一首……………柴谷善太郎氏藏

本 欄

釋尊時代印度之思想及び信仰……………赤沼智善 (一)

西山證空上人の著書に就いて……………上杉慧岳 (四〇)

明義進行集とその著者……………橋川正 (八九)

先德餘香……………南條文雄 (二〇二)

親鸞聖人の太子和讚について(口繪解説)……………日下無倫 (二〇五)

印度の醫方及び藥物……………泉芳環 (二二)

——ヘルンレ圖書の解題として——

佛光寺派寺院に傳はれる宗祖門侶史料……………日下無倫 (二七)

——光照寺光園院兩傳の宗祖門侶交名牒に就いて——

佛教研究會、佛教史學會々報

新刊紹介

最近佛教關係研究要目

會 告

公開講演左の通り開催致候條御來聽被下度此段御案内申上候 敬具

▲講 師 文學博士 吉澤 義則氏

▲演 題 寫經に用ひられたる於乎止點

▲日 時 十一月十四日(火曜日)午後三時

▲會 場 於眞宗大谷大學講堂

大正十年十一月一日

京都市室町頭眞宗大谷大學内

佛 教 研 究 會

佛教研究會附本學記事

□五月四日、學生二百名奈良法隆寺方面へ見學旅行致すに就き、その豫備として本日午後三時本學講堂に於て左の二氏の講演あり。

東大寺に就て

法隆寺について

日下 無倫氏
橋川 正氏

□五月七日、學生二百名教職員二十名、奈良法隆寺方向へ單日旅行を行ふ。當日見學せる主要なるもの左の如し。

帝室博物館、東大寺(大佛殿、三月堂、戒壇院)——以上奈良、法隆寺、金堂、講堂、綱封藏、五重塔、聖靈院、五重塔、上宮王院(夢殿)、中宮寺——以上法隆寺

□五月二十三日、三月下旬より約一ヶ月間、滿鮮佛教史蹟踏査のため本學より出張を命ぜられたる橋川正、日下無倫二氏歸學につき、本日午後三時本學第一教室に於て佛教研究會第二回例會を開き、並に會議室に於て蒐集品展觀を催す。

一、蒐集品展觀

(寫眞、圖書、拓本、古瓦、并に考古學參考品)

二、講演題目如左。

京城、平壤、開城、奉天の佛教史蹟 橋川 正氏
大邱、慶州、高靈、伽耶山の史蹟に就て 日下 無倫氏

□六月三十日、午後三時本學講堂に於て佛教研究會第三回公會講演を開く。講師演題左の如し。

佛教研究會附本學記事

禪宗史の意義

鈴木 大邦氏

□滿鮮見學旅行、明春卒業すべき專修科二年生は、教職員安藤泉、安富、金森、細川、青山、本田七氏引率の下に、七月六日京都出發約二週間の豫定を以て滿鮮宗教事情見學をなす。重なる見學場所左の如し。

大連、旅順、遼陽、奉天、撫順、平壤、京城、釜山

□十月六日、大谷かれよに於て本年度委員總會を開き、會務報告、來年度委員推薦あり。後晚餐を共にして散學す。來集者金子、日下、橋川、山口、名畑、北峯、磯、多屋、藤井、高の十一名。南條會長、藤岡理事、松永委員事故缺席、同日委員中滿期辭任せる者左の如し。

山口 益君、名畑應順君、北峯順修君(已上研究科)

多屋 弘君、松永諦點君、(專修科學生)

尙留任及び新任せる大正十一年度本會委員左の如し。

金子教授、日下幹事、橋川助教(已上教職員)

磯 含雄君、日野 環君、櫻部文鏡君(已上研究科)

藤井周慶君、高柳恒榮君、堂谷憲男君(已上學生)

□十月十六日(開校紀念日)一般佛教研究資料、朝鮮佛教研究資料、西藏佛教研究資料の各展觀を校内に開催す。

佛教史學會々報

□琵琶湖廻遊 去五月二十九日、廣瀬南雄、日下無倫、二氏を

初め會員二十名、廻漕船白石丸にて琵琶湖一周を企て沿岸の史蹟踏査をなす。近江舞子、竹生島、長命寺等に下船したるが、就中、本邦古代史よりその名を知られたる竹生島にては、種々の寶物珍籍を拜觀して大に得るところありき。

□會員橋川正氏は、暑中休暇を利用して史料蒐集のため七月十日より三日間高野山へ、同下旬、十日間を關東に於ける笠間、石岡(國分寺址)、土杉、鬼長等の眞宗史蹟を巡拜せり。

□會員日下無倫氏は七月上旬、近畿地方に於ける眞宗史蹟、殊に八尾、岸和田、貝塚、堺等を巡り、同中旬、近州阪田郡の佛光寺派寺院を訪へり。

新刊紹介

●六方禮經講話

南條文雄著

漢譯四部ある中、後漢の安息國三藏安世高所譯の『佛說尸迦羅越六方禮經』を講義せるものであつて、漢文、和譯、熟字解、通釋を挙げ、餘程親切に説明してある。實踐的佛教倫理を究めんとする者は勿論、『六方禮經』は廣く佛教信者の必讀すべき經典であるから、この經の平易なる註解書が殊に謹嚴なる著者に依つてものせられたことは吾人の大いに欣ぶ所である。菊判四〇頁定價五拾錢、發行所京都法藏館。(弘)

●異部宗輪論講義

舟橋水哉著

小乘二十部の簡單な歴史と教義とを列舉した宗輪論が本年の夏安居に於て、豫て小乗佛教研究に造詣深き舟橋教授によりて講ぜられた、その講録である。著者もその序説に於て指示せらる、如く宗輪論は小乘各派と大乘教との比較研究に須要な書であるにも拘らず、然る可き講義録が今までなかつたのであるから、今後本論を研究するものに缺くべからざる指針となるであらう。

本文の解釋に先ち、初めにその内容の概略を説示し、著者世友菩薩の年代、位置等に就いて簡單に述べ、翻譯末註本文の種類題目の解釋の數項を上古。本論は第一編二十部の歴史と第二編二十部の教義とに分ち、各項の下には宗輪論の本文と部執異論及び十八部論の本文とを並び上げて相對稱せしめ、字解、講義に於ては著者獨特の簡決な説明を施し、須要なる問題あるに従ひ餘論を設けて、廣く南北兩傳、内外學者の學說を網羅し、異義異說を批判論證する。卷末の附録には宗輪論所述の諸種の重要な事項に對して補遺となり、引證となる様な文獻を廣く漢譯諸經論中より集め、或は諸傳に於ける異部分裂の分派表、二十部名稱比較表、教義の異同表等を掲載して諸傳の記述する所を比較對檢するに ならしめ、尙本論研究の參考書を各研究事項に分ちて詳細に列舉してある所など、本論の講義と相俟つて、宗輪論入門としての完備を盡せるものであらう。但し宗輪論に對する研究としては漢譯諸本と西藏傳諸本及南傳殊にカトハ一

會 則

第一條 本會ハ佛教研究會ト稱ス

第二條 本會ハ佛教並ニコレニ關聯スル諸般ノ研究ヲナスヲ目
的トス

第三條 本會ハ眞宗大谷大學敎職員學生及本會ノ主旨ニ賛同ス
ルモノヲ以テ組織ス

第四條 本會ノ事業左ノ如シ

一、隔月一回例会ヲ開ク

二、隨時講演會ヲ開ク

三、年四回「佛教研究」ヲ刊行ス

四、隨時出版ヲナス

第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一、會 長 一 名

一、理 事 一 名

一、評 議 員 若 干 名

一、委 員 若 干 名

一、書 記 若 干 名

第六條 本會々員ハ「佛教研究」ノ配布ヲ受ケ例会及講演會ニ出

席スルコトヲ得

第七條 本會々員ハ年額金參圓ヲ納ムルモノトス

佛教研究

年四回七月發行
會費年額金參圓

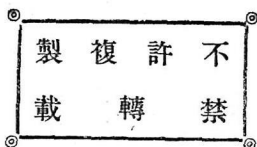
一部賣代金ハ隨宜申シ受ク

廣告料

一頁 金拾圓、半頁 金五圓

佛教研究第二卷第四號

大正十年十月二十二日印刷
天正十年十月二十五日發行



編輯兼 發行 者 佛 教 研 究 會

右代表者 藤 岡 了 淳

印刷者 須 磨 勘 兵 衛

印刷所 京都市北小路通新町西入
内外出版株式會社印刷部

發 行 所

京都市室町頭眞宗大谷大學内
振替大阪四四九九七番

佛 教 研 究 會